

# 小学校教育実習に向けた 基本的な板書技術の習得をめざすために

## Developing basic Writing Skills on Boards at Classroom for Teaching Practice at Elementary Schools

勝 田 み な

Mina Katsuda

### 〈摘 要〉

小学校教育実習は3週間行ふ。ほとんどの小学校の教室には授業で使う黒板と教室の背面にある連絡事項などで使う黒板がある。授業でタブレットを使用する小学校は増えつつあるが、現状は黒板を使用する学校が多い。学生は、黒板に文字を書く経験が少ない。小学校の授業などで、今も使用される黒板に文字を書くためには、板書の練習が必要になってくる。そこで、本稿では、小学校教育実習に向けた基本的な板書技術の習得をめざす指導について考察する。模擬授業を経験し、少しでも小学校教育実習に意欲をもって臨んでいけるための一つのきっかけになればという期待もある。

板書の文字に苦手意識を感じている現職教員もいるが、大学の授業の中で基本的な技術を習得するための時間を捻出したいものである。実践的な取り組みは、技能向上につながるため、学生が自信をもって実習に臨めるような環境作りは重要であるが、カリキュラムに入れるなどの迅速な対応が難しいところは課題である。

〈キーワード〉 小学校教育実習 板書 模擬授業 技術の習得

### はじめに

小学校教育実習を初めて行うことになる大半の学生は、黒板に文字を書く経験が少ない。大学の講義室は、ホワイトボード設置が多くなり、授業ではホワイトボードを使用し、パワーポイントを使用する形態が多くなったため、黒板を授業で使用する機会は少なくなりつつある。小学校においては、授業を行う際は黒板を使用する学校が多い。小学校ではタブレットを使用する授業も展開されているが、例えば生活科の植物の観察のように、記録をとどめておきたい内容の場合や各児童の意見や感想をみるロイロノートなどに活用されている。現状は、黒

板を使用して授業を行っている。

小学校教員をめざす学生が、黒板を前にして戸惑ったり躊躇したりすることがあれば、教育実習前までには改善させ、少しでも黒板に文字を書く時間を増やしたいものである。押木らは、「教師にとっての『板書の能力』はかなり幅広く考える必要がある」<sup>(1)</sup>と述べており、板書の能力の構造のうち、「文字を書いていくという行為に関する能力」について研究を進めていた。大きな黒板に、どの文字をどこに、どの程度の文字数を書くのか、子どもたちが注目している中で正確な文字をどのくらいの速さで書くのかなどを練習する機会を設定する必要がある。学生の板書書字技能の向上をねらいとした三次・堀は、大分大学教育学部専門科目「板書演習」の選択科目として、教員養成カリキュラムに取り入れた授業実践を報告した。「受講した学生の多くは文字の筆順や文字のバランスを注意するようになり、読みやすい文字が書けるようになったと意識し、板書に対する苦手意識が軽減されたことが分かった」<sup>(2)</sup>と述べている。板書技術の向上に特化した授業が受けられる環境にない学生は、自主的に書字練習や模擬授業の練習を行うことになる。小学校教育実習前の限られた時間の中で、授業中に少しでも黒板に文字を書く練習を試みる時間は必要になってくるだろう。授業力の育成について木村は、双方向型の授業において板書指導を取り上げており、板書を書くときの姿勢、文字の大きさ、板書内容を指導した<sup>(3)</sup>。模擬授業でまず自信をもたせて、小学校教育実習へ臨むためにも、基本的な板書技術を身に付けておいた方が、板書計画を立てる段階においても、苦手意識が軽減されるのではないだろうか。

そこで、筆者の担当する「総合的な学習の時間の指導法」の授業の中で、毎回板書の練習時間を設定することにした。小学校教育実習までに、教職課程の授業の中でも板書の機会が取れないことが、現実起こっているからである。学生自身が自分の書いた文字を見て、自分自身の課題や次回の目標を立てることができるし、学生同士でお互いの板書についての意見交換を行うことにより、客観的な視点から自分自身の取り組みをふり返ることにつながるのではないだろうか。

実践的な板書の練習から導かれた自信を、まずは模擬授業で活用させる。次に模擬授業での実践を踏まえて、小学校教育実習での授業体験の中で意欲的に臨めるためにも、板書の練習時間の確保は必要なのではないかと考える。そこで本稿では、小学校教育実習に向けた模擬授業を通して、基本的な板書技術の習得をめざす指導について考察する。

## I. 小学校教育実習

名古屋経営短期大学子ども学科では、小学校教諭二種免許状（以下、小学校）取得にあたり、1年秋学期より小学校のカリキュラムが組まれている。学生の希望を優先するが、基礎学力講

座Ⅰの成績と小学校教育実習担当教員による面接によって、小学校のカリキュラムを履修できるのかどうかを決定する。また、幼稚園教育実習の単位を取得した者は、小学校教育実習を受けられることが条件になっている。小学校での実習希望者数は、年度によってバラツキがあるが、1名だけが履修している年度もある。希望した学生には、実際に1年次秋学期の小学校の科目を受講してみても続けられるのか、1年次が終わった時点で再度、将来の進路を見直す機会も与えている。

子ども学科は保育士・幼稚園教諭の資格取得希望者が大半であり、小学校の履修科目は、幼保の履修科目プラスで履修することになるため、長時間の学びを継続していく意欲をもち続ける必要が出てくる。ただ単に、小学校の先生になりたいという漠然とした考えでは、到底学習が進んでいかない。小学校のカリキュラムを受けようとしている学生には面接を行っているが、その時の面接官は、小学校で教鞭をとっていた教員が行うことによって、小学校勤務の現実を伝えるとともに、小学1年生から6年生までの学習と授業以外の活動（行事、給食、清掃、クラブ活動、児童会や教師の各種委員会、休み時間、朝の会と帰りの会、通学団、部活動、保護者対応）など、多岐にわたる仕事を進めていくことを伝えている。安易な気持ちで受けしてみると普段の授業について行くことができなくなるし、時間的な拘束にも困惑してしまう。小学校教育実習は保育園実習や幼稚園実習とは異なり実習期間も長く、指導内容が多く、厳しい実習も行うことになる。この選択は、ある意味覚悟が必要な小学校カリキュラムと言えるだろう。

## Ⅱ．板書技術の習得方法

筆者が担当する、小学校教諭二種免許状取得のための教職に関する科目「総合的な学習の時間の指導法」の授業時間を利用し、学生が板書する機会を設けた。

毎回、板書するテーマを決めて、黒板を分割し、受講生の板書が一目瞭然わかるように板書練習を行った。授業は、2020年度と2021年度の4月から小学校教育実習を行うまでの10回ほどの授業の中で実践した（表1）。対象者は、2020年度については名古屋経営短期大学3年生8名（男子3名、女子3名、実習を行わない男子1名女子1名）、2021年度については、名古屋経営短期大学3年生1名（女子1名）である。2020年度の小学校教育実習へ行かない2名には、6名の板書について意見を述べてもらった。

学生へは、本研究についての説明を書面と口頭にて行い、研究に協力するかどうかは自由であり、撤回することもできる。研究成果は学会発表や論文集に公表されるが、個人を特定できるような情報は公表されないことなどについて同意を得ている。記録写真については、掲載の許可を取っており、学生の感想などは個人が特定されないよう、複数の感想を入れることにした。

本稿での基本的な板書技術は、文字の大きさ、濃さ、バランス、レイアウト、書き順、書く速さなどとした。練習回数が増えるにつれて、板書の応用技術として餅川教育実践技術の視点でもある、①構造、②説明、③発言、④発問、⑤生徒<sup>(4)</sup>を、模擬授業を進めていく際に含む場合もあるが、あくまでも基本的な板書技術の習得をめざした。

表 1 板書の練習

授業回数	板書の練習
1	チョークの持ち方 文字の大きさ 濃さ 色チョーク 名前（縦書き 横書き） ○月○日（曜日）日直
2	ひらがな50音順（横書き） 教育実習で頑張ること
3	「総合的な学習の時間」目標 内容 わかりやすく説明
4	ある小学校の総合的な学習の時間 単元 探究課題 内容
5	俳句（縦書き） 国語科の板書例
6	模擬授業のめあて 単元 目標 指導計画 頑張ること
7	模擬授業の板書計画 ワークシート
8	模擬授業の実際(1)
9	模擬授業の実際(2)
10	模擬授業の反省 教育実習に向けての意気込み

（筆者作成）

### Ⅲ. 小学校教育実習に向けた板書の実践

小学校教育実習までの授業回数は、2020年度では9回、2021年度では10回だった。板書の実践について、第Ⅰ期（授業1回目、2回目）、第Ⅱ期（授業3回目～5回目）、第Ⅲ期（授業6回目、7回目）、第Ⅳ期（授業8回目～10回目）に分けて報告する。90分の授業時間の中で、板書の実践は約20分間に集中して取り組んだ。

#### 1. 第Ⅰ期（授業1回目、2回目）

第1回目は、自分の名前を縦書きと横書きをしたが、名前の一文字目の第一画を書くまでに躊躇した。普段の授業で、何気なく見ている黒板に、いざ自分が文字を書くことになると、チョークを渡されても書き出すまでの時間を要した。

チョークの持ち方や文字の大きさ（学年に応じて）、濃さ、書く速さを伝えた。木村は、模擬授業回数を増やす反復重視が授業力向上には不可欠だと感じており、板書については文字の

大きさを重点的に指導した。また、「内容によって大小の変化をつけ、簡単な絵や記号等を使い、生徒役の興味関心を高めると共に、後で見たときに見やすくなるよう」と学生に配慮することを求めた<sup>5)</sup>。木村の実践から、学年に沿った、文字の大きさと白チョークだけではなく、色チョークの効果的な使い方についても確認した。自分の名前を縦書きと横書きで書き終えて、教室の後ろの席から黒板に書いた自分の名前をながめて、各自感想を話し合った。初回の板書の実践は、小学校教育実習へ行かない2名の学生も板書の実践を行った。

第2回目は、ひらがなを50音順で板書した。これは、三次、堀の実践<sup>6)</sup>を参考にした。書き順、とめ・はね・はらいなど、細かいところへの注意を怠らない点を意識させた（写真1、2）



写真1 ひらがな50音順を書く

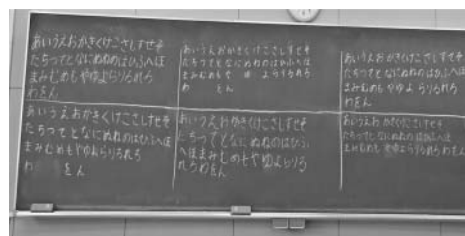


写真2 ひらがな50音順

6人の板書を上記のように示すことによって、文字の大きさ、形、バランス、書き順、チョークの濃さなど、ふり返りをすぐに行うことができた。

## 2. 第Ⅱ期（授業3回目～5回目）

第Ⅰ期では、受講生が複数同時に板書をしていたが、第Ⅱ期からは、一人ずつ板書の実践を行うことにした。

第3回目の授業では、学習指導要領「総合的な学習の時間」の目標、内容を板書した後、わかりやすく説明をした。板書をしている間、他の学生は、書き上がるまで待つことになる。文字の大きさ、濃さ、レイアウトやバランスは良いか、書き順が正しいか、書く速さはどうか、説明しながら書いていないか、黒板のどのあたりに立って説明をするのか、黒板のどの場所を書くのか（両端や下の方は見えにくい）、板書する量は少なすぎたり多すぎたりしていないか、など実際に体験をしてみることで気付くことができた。内容については、わかりやすく板書することを考えさせ、板書した内容を、黒板のどこに立って説明をするのかを実践した。また、自分の板書を撮影し、ふり返りに活用させた。

第4回目は、教育実習で担当する学年の単元を、ある小学校のプランを参考にして、自分の考えをまとめたものを板書した。また、教科等で育成する資質・能力との関連を考えさせ、例えば国語科では、言語能力を育成することを実践することにした。

第5回目は縦書きを行った。俳句を書いてみたり、国語科の題材での板書例を書いてみると、横書きとは違う印象をそれぞれが感じ取ってくれた。横書きでの練習を第4回目までの授業で積んできたので、縦書きでの練習では、文字のバランス、書く速さ、文字の書き順な

ど、再度学ぶ必要があることが確認になった。

### 3. 第Ⅲ期（授業6回目、7回目）

第6回目では、「総合的な学習の時間の指導法」での模擬授業を考えた。教育実習で担当する学年で配布した資料を参考にして、単元名、目標を考え、板書計画を立てたのち板書した。また、模擬授業で頑張ること、板書での注意する点を挙げ、発表した。

第7回目では、模擬授業のまとめとして、どのようなことを児童に伝えたいのかを板書した。また、黒板に文字を書くだけでなく、実物や写真、資料等の「掲示物」を効果的に使うことも考えさせた<sup>(7)</sup>。

### 4. 第Ⅳ期（授業8回目～10回目）

第8、9回目は模擬授業を行った。模擬授業は一人30分間ずつ行うことにした。実習先の小学校では、板書の仕方を統一している学校もあった。板書ルールとして必ず板書をする内容がある。また、板書の条件としてポイントが挙げられている。基本的な書き方は、本研究の第1回目板書の実践と変わらないため、実習先から提示された板書の仕方も参考にしながら模擬授業を行った。板書計画に沿って黒板に書き進め、資料を貼ったり絵や図を描いたり工夫した。中には、学生が児童役になって板書する授業もあった（写真3、4）。



写真3 模擬授業



写真4 模擬授業 児童役としての板書

模擬授業が終わってすぐ授業の反省会を行った。模擬授業評価表にチェックしながら、良かった点、改善点を書いて、模擬授業者へ渡した。客観的に自分の模擬授業を確認することができた。第10回目では全員の模擬授業のふり返りを行った。反省会では、自分の書いた板書について意見をもらい、改めて文字の大きさ、濃さ、レイアウトやバランス、書き順、書く速さなど基本的な板書技術を確認することができた。小学校教育実習前に実習前の7名へ、事前アンケートを行った。参考にしたのは、林らの論文である<sup>(8)</sup>。実習前に「自信がないこと」と「自信のあること」をそれぞれ強く思う順に3つ選択させた。その結果、「自信がないこと」の3位に板書を挙げた学生が1名、「自信があること」の3位に板書を挙げた学生が3名いた。

模擬授業までに、毎回の授業の中で板書を実際に使い、少しずつ練習を行ってきた。お互いの板書を見たり、自分の板書を写真撮影したりして、学生なりに体験を積み重ねてきた。初回のように、一文字書くのを躊躇した様子は、なくなってきたし、回を重ねるごとに学生

自身の成長が伝わってきた。この変容から、学生自身が理解を深めたと考えられる。

#### IV. 小学校教育実習での研究授業

小学校の教育実習は3週間である。事前訪問で担当学年を聞いているため、実習までの期間で教科書に目を通して実習担当者から細かい指導も受けていた。同時に教員採用試験の勉強もラストスパートの時期でもある。どの授業でも黒板を一度は使う授業が展開されたようだ。

実習後にもアンケートを行った。「自信がついたこと」、「課題となったこと」について、それぞれ強く思う順に3つ選択させた（前出同様）。その結果は、「自信がついたこと」の1位と2位に板書を挙げた学生が1名ずつ、「課題となったこと」の2位に板書を挙げた学生が1名いた。また、実習中の板書について、①うまくいったところ、②うまくいかなかったところ、③指導教官（担任）からの指導、を自由記述で回答させた（表2～4）。

表2 実習中の板書について うまくいったところ

- ・見やすい字大きい字を書いたところ
- ・大きく見やすく綺麗な字で書くことが出来た
- ・挿絵を使用し場面がわかるようにした
- ・目当てにもなっている主発問を黒板の真ん中から書けたところ
- ・板書する量に応じて字の大極を変えることができたところ
- ・字を書くスピード
- ・研究授業まで実践授業なくて研究授業の板書が初めてでしたが、板書に時間かけずにスムーズに書くことができました。まとめまで入れることができました

見やすい文字を書くためには、大きさとチョークの濃さは重要なポイントであり、練習の成果が出ていたと言えよう。また、文字を書く速さにも答えているが、子どもたちを待たせるような板書をしていなかったことが伺える。教科によっては縦書きと横書きがあるため、板書計画を立てたことで、研究授業での板書が初めてだったにもかかわらず、スムーズに書けた点は大学での板書の実践が活かされた。

表3 実習中の板書について うまくいかなかったところ

- ・板書を書くタイミングが遅れたこと。線が曲がっているところがあったこと
- ・もっと丁寧にできた。授業してるから少し慌ててしまったところ
- ・黒板左側の感想、やってみたいことの文字の大きさが小さい
- ・子どもの発言のどこを取り上げて短くまとめるかが難しく時間がかかってしまったり自分なりに解釈して言葉を少し変えてしまったところ
- ・マスがついているボードを子どもたちのノートに見立ててひっ算を書くときに、繰り上がりを書くところの問題とぶつかってしまった
- ・児童に書いてもらう時に児童の字がデカくて予定してた板書と違う形にはなりました

板書計画通りには進まないのが、小学校の授業であるが、想定外の子どもたちからの反応によって慌ててしまったり、子どもの発言の何をどのように板書として書いていけば良いのか、

瞬時の判断に困ったりして、うまくいかなかったと感じたようだ。また、子どもたちが黒板に直接解答をする場合、予想以上の大きさの文字を書かれたため、ここでも想定外の板書となり、戸惑った様子が見ええる。

表4 実習中の板書について 指導教官からの指導内容

- ・課題提示のタイミングが遅れていたこと。余分な板書があったこと
- ・字が見やすいとか板書ではそんなに言われなかったです
- ・前日に流れを確認した際、はじめの「へんだなと思うところ」の発言がそこまで出ないと思っていてスペースを狭くしていましたが、思ったよりも発言が多く、挿絵を何回か左へずらしたりしていたもう少し予想を立てることが大事
- ・先生方からも見えやすくて良かったと褒めてもらいました
- ・字を書くスピードがどんどん上がった
- ・目当てなどを貼れるようにする際、〇〇〇スタンダード（板書など実習校のルール）に沿っていたり、見やすい色を選んでいたところが良かった
- ・字がきれい
- ・気が付かないうちに文が右肩下がりにになってしまうので、常に意識すること

見えやすくて良かった、文字がきれい、見やすい色を選んでいたところが良かったなど、大学で練習をしてきたことが活かされた。指導教官から認めていただけた点は、学生の自信につながったと言える。研究授業での板書を紹介する（写真 5～7）。

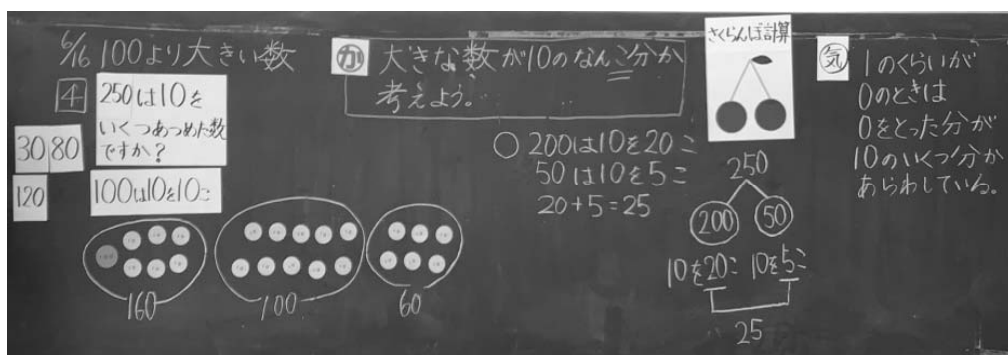


写真 5 研究授業 1

算数の研究授業を行うまでに、指導教官の授業をしっかり観察していた。子どもたちとは積極的にかかわっていたので、毎日明るく元気に実習に取り組むことができた。実習前のアンケートでは「自信がないこと」の第3位に板書を挙げており、その理由として子どもの実態に合わせた授業を行うことができるのかどうか不安材料であったが、見やすい文字、大きい文字を意識して板書を進めることができ、実習前の不安は全く感じられず、楽しい授業ができたと話した。





写真6 研究授業2

道徳での研究授業は指導教官からの指示で行うことになった。道徳になるとは予想もしていなかったため、緊張の日が続いていた。子どもたちとは毎日コミュニケーションを取って過ごしていたので、研究授業では活発な意見が出た。想定外の子どもたちからの発言のどの部分を板書していくのが良いのか、とっさの判断に困っていた様子で、一度貼った挿絵を何度も動かすことになってしまい、授業が盛り上がった様子がうかがえる。板書計画を立てていても実際はどのような展開になるのか、想定外の対処の仕方など良い経験になった。

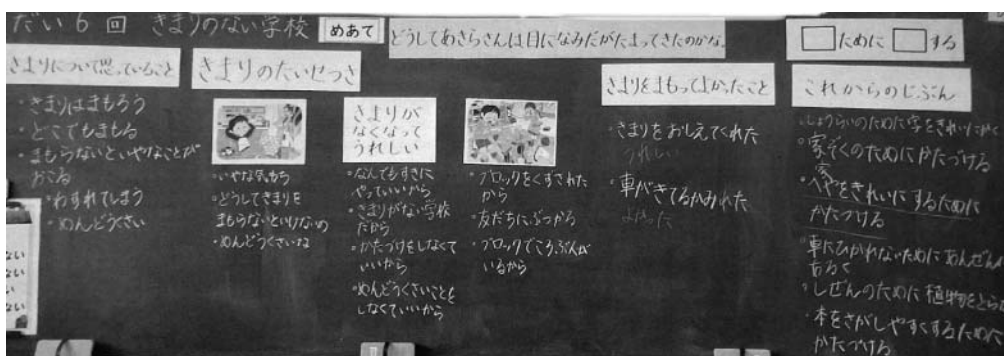


写真7 研究授業3

実習前のアンケートでは、「自信があること」第3位に板書を挙げていた。また、実習後のアンケートでは「自信がついたこと」第1位に板書を挙げていた。

もともと文字を書くことには抵抗のないこの学生は、研究授業でも最後までやり切ったと達成感をもっていた。実習校の先生方へ、「書きたいことをどのような書き方にすればよいのか」と質問をして研究授業に臨んだ。

研究授業前日には隣のクラスで道徳の授業を行い、その時の反省を活かした板書が上記の板書である。掲示物の色を変えたり、挿絵を入れたりして、板書の工夫が感じられた。文字を書くことが好きで、初回から躊躇なく板書をしていたが、初回から本人も気付いていた点だが、まとめの段階になると（写真7で言えば黒板の右側）、文字を書くのに疲れてきて右下がりになる点を悔やんでいた。この点は指導教官も指摘しており、学年と文字の分量を考えることが課題となった。また普段から、子どもたちの名前を呼んで話しかけることを心が

け実践したことによって、会話がしやすくなり、研究授業までの実践授業においても明るい雰囲気で充実していた。

記録写真は特にないものの、研究授業に限らず板書を実践してきた他の学生においても、大学での板書練習については、模擬授業を含めて実践してきたことを少しでも活かすことができたと話してくれた。堀内は、「学習の流れをわかりやすく書き表すことによって、知識を共有し論点を明確にできる板書の重要性はいうまでもないが（中略）板書はオーソドックスであると同時に最も核心的な教授スキルであるといえよう」<sup>9)</sup>と板書の技術を習得する必要性について説いている。

## V. 現職の小学校教諭から

板書について現職の小学校教諭（A 教諭）にインタビュー調査を行った。A 教諭へは、本研究についての説明を書面と口頭にて行い、研究成果は学会発表や論文集に公表されるが、個人を特定できるような情報は公表されないことなどについて同意を得ている。方法は、インタビュー調査を行った。2021 年 7 月、名古屋経営短期大学筆者の研究室において 90 分ほど話を伺うことになった。インタビューの質問事項は、次の 4 点である。

- ① 実習生が板書を書く時に、どのような指導をしているのか
- ② タブレットはどのような場面で使っているのか
- ③ 黒板はどのような場面で使っているのか
- ④ 教員養成校で、板書についてこのような指導をしておいてほしいことは何か

教員養成校において、板書の練習と指導をどの程度行っておくと、将来、教壇に立った時に役に立つのかなどを中心にインタビューを行った。また、インタビューの回答についてまとめたものを A 教諭へ確認を取り、掲載の許可を得た。

はじめに、① 実習生が板書を書く時に、どのような指導をしているのか聞き取りをした。

まず、板書計画を立てます。学習の流れがわかるように、ある程度どこにどのように記していくのか見当をつけておくことは大切です。実践では、色の使い分けです。基本は白、重要語句は黄色、枠線は赤など、きまりを決めて書くことです。  
文字だらけにならないように、吹き出しや記号などを使うと良いです。  
横書きでは、だんだんと上がったたり下がったりするので、平行を意識します。  
書き順・筆順は、せめてひらがなや 1・2 年生で習う基本の漢字の筆順くらいは間違えないでほしいです。できない若手が多いです。できる人から見ると恥ずかしいことです。スピードは慣れです。丁寧にかけながら、少しずつスピードアップできるように実践で身につけていくしかありません。

A 教諭の語りから、基本的な板書技術の習得の中で、色チョークの使用、書き順、書く速さを板書の練習として取り入れていたことは、正しかったことが明らかになった。また、掲示物を使用する点も板書には必要であり、模擬授業で使っていた学生が自信につなげたことも明らかになった。

次に、② タブレットはどのような場面で使っているのか、③ 黒板はどのような場面で使っているのかについて、A 教諭の話は、以下のとおりである。

タブレットは、調べ学習には最適です。図書室や PC 室に行かなくても、その場でさっと調べられる利点があります。また、ドリルソフトなども入っているので、紙のドリルやスキルが終わった子が、さらに習熟を図るためにも使われます。

カメラ機能も、観察や実験に使ったり、見つけたものを撮影してワークシートに貼り付けたりするのに役立ちます。ピアノや、アルファベットの発音など、後からその単元学習に特化したソフトを入れられるので便利です。

タブレットとの比較でいうなら、やはりまだベースは黒板です。

教師用タブレットは、主に動画や画像をモニターに映して表示しています。それ以外の文字はまだ黒板です。

小学校教育実習においても、学生からタブレットを使用した授業があったことを聞いた。1・2 年生の生活科で使っていたようだ。だが、授業以外にも連絡事項は、全員が目に見える黒板の使用は主流のようである。現在は、目的に合わせて黒板とタブレットを使用していることがわかる。

最後に、④ 教員養成校で、板書についてこのような指導をしておいてほしいことは何か、についてである。

①に書いたようなことが養成校で予習されていると、ありがたいです。ひらがなの書き方などは小学校の書写で終わらせてくるものですが、大人になって気づくこと意識できるようになることもたくさんあります。字が整っていないと、子どもにとっても保護者にとってもマイナス評価です。教師としての力量を測られるカテゴリーの一つともいえるので、書くことの多い学生のうちに意識できるなら、やっておくにこしたことはありません。

実習が始まると、なかなか板書の練習をしている時間はありません。もし可能なら、大学の黒板を使って練習する機会があればと思います。

三次・堀らのように、大学のカリキュラムに本学も演習科目が導入されればそれに越したことはないが、小学校教育実習へ行くことが決まっている学生には、板書を意識する気持ちを、まずもつことから始める必要があることが明確に示された。

A 教諭のコメントにもあるように、担任としてたとえば授業参観に来た保護者が、担任の板書の文字を見て、「この先生は大丈夫なのか」とマイナス評価を受けてしまわないようにするためにも、養成校からの板書練習は、短時間でも繰り返して行い、基本的な板書技術をしっかりと習得させてから、小学校教育実習へまずは臨むことが求められることも明らかになった。学生のやる気を起こさせるためのモチベーションを保つことが、養成校の役割になっている。

愛知県義務教育問題研究協議会の若手教員を指導する指導者の意識調査によれば、若手教員の経験年数において学ばせたい順位をつけてもらった（表 6）<sup>(10)</sup>。この調査では、指導者とは、校長、教頭、主幹教諭、教務主任、校務主任である。若手教員とは、新規採用 2 年目～6 年目の教員の総称である。

表 6 若手教員のそれぞれの経験において最も重視する研修項目

発問、板書、評価など授業スキル			
	1 番目	2 番目	3 番目
1 年目	182人(23.7%)	255人(33.2%)	137人(17.8%)
2～4 年目	214人(27.9%)	161人(21.0%)	70人(9.2%)
5、6 年目	139人(18.1%)	70人(9.1%)	36人(4.7%)
経験年数問わず	190人(24.7%)	130人(16.9%)	73人(9.5%)

（出所：「若手教員の育成を図る研修の在り方」参考資料 愛知県義務教育問題研究協議会）

1 年目では 1 番目と 2 番目の合計が 56.9%、2～4 年目では合計が 48.9%であり、若手自身も板書については自信がないと思っている教員もおり、指導者から見ても改善の余地ありと板書技術の向上が求められていることが明らかになった。授業力を上げるための一つに、板書の活用が提示され、どの授業においても大切な要素を果たしていることが理解できた。板書から授業の充実につながっていくものであろう。福本は、よい板書にするための 7 つのポイントを示している（表 7）<sup>(11)</sup>。

表 7 よい板書にするための 7 つのポイント

1. 教材研究をした後、学習の始まる前に板書計画を立てること
2. 「課題」と「まとめ」を対応させること
3. 板書計画の上で、子どもの発言を生かし、思考を焦点化させること
4. 語や文、文章の羅列ではなく、線で結び構造的にまとまりのある板書であること
5. 語や文、文章や児童の発言、知識・技能に関わる内容などが、整然とし、文字の大きさ・太さ・囲み文字など、また、紙の色や色チョークの活用で美しくメリハリを付けること
6. ノートに写す板書ではなく、児童が工夫できる余地のある板書にし、前時や次時の学習につなげること
7. 黒板はいつもきれいにすること

（出所：福本菊江 初等教育研究所 今月の指導（11 月））

本研究での小学校教育実習の実習校においても、この 7 つのポイントを守って授業を進めていくように指導があった。

## VI. 考察

本稿では、小学校教育実習に向けた模擬授業を通して、基本的な板書技術の習得をめざす指導について考察した。この章では、板書技術の向上を論じた先行研究と照らし合わせて、小学校教育実習を意図的に行うことにつながったのかを考察する。

### 1. 基本的な板書技術の習得をめざす工夫

板書練習では、毎時間のテーマに沿って書く練習を行い、6人分の板書が一目見てわかる

ように黒板を6分割にしてお互いの板書を見比べた。他者からあれこれ言われなくても、自分の書いたものを客観的に比べることによって、改善していく工夫はできた。翌年度は、受講生が1名だったので、筆者からの指導を直接受け、改善すれば良くなる点をすぐに取り組むことができた。また、板書は毎回記録写真として撮影をしており、前時の課題を本時では達成できているのかどうかを、客観的評価で繰り返すことが可能だった。三次らの研究結果では、板書演習の成果として学生の意識調査を示した<sup>(12)</sup>。「書き順、文字のバランスに注意するようになった」については、三次らの研究では肯定的な回答がほとんどであり、本研究と同様であった。「板書に対する苦手意識がなくなった」は、「肯定的な回答が多いものの、弱い否定を示した回答も一定数あり、平均は大きい。板書に対する苦手意識はなくなったとはいえないが、軽減された状態にあると捉えられる」<sup>(13)</sup>と分析した。本研究においても事前アンケートでは、7名中1名が「自信がないこと」の第3位に板書について回答しており、その理由として「子どもの実態に合わせて授業を行い、板書の文字のバランスが取れるのかどうか不安」と挙げた。板書計画を立てたとしても、子どもの反応がどのようなのか、結局は、板書だけに焦点を当てることは難しいと結論付けた。三次らは、「具体的な到達目標は、授業終了後に行われる教育実習の時点で、児童・生徒にとって読みやすい板書を行う技術が身につくこととしている」<sup>(14)</sup>と続けており、また押木らは、「教科の内容等と関連する事柄が多く回答されていた。このことは、書字能力は基礎として当然の能力と理解すべきなのか、それとも内容が適切であることが最優先され则认为すべきなのか、ここでは明らかにできていない」<sup>(15)</sup>と、書字技能向上の必要性に関して、教科の内容についても言及している。本研究の受講生が、「自信がないこと」に挙げた教科内容にかかわることと、授業の進み具合に関する部分に当たる部分である。しかしながら本稿では、基本的な板書技術の習得をめざすことを目的にしているので、あくまでも基本的な板書技術に焦点を当てて検討をしていくことにした。

## 2. 小学校教育実習に意欲的に向かうための模擬授業

模擬授業では、板書での基本的な技術である文字の大きさ、濃さ、バランス、書き順、書く速さなどの習得はもちろんのこと、板書の応用技術として餅川の示す教育実践技術の視点、①構造、②説明、③発言、④発問、⑤生徒（「Ⅱ.板書技術の習得方法」参照）について自然と使っていた。模擬授業の中での基本的な板書技術については、初回から練習を重ね、常に意識しているため、大きな混乱もなく書き進んでいくが、板書した内容を説明する場合、黒板のどこに立てばよいのか、体の向きや文字を指す時の手の角度などが難しかったようだ。石井は、「板書は、児童にとっては学習内容を理解するための視覚的な補助の一つとして役立つものである」<sup>(16)</sup>と述べているように、板書は45分間の授業をふり返り、授業の流れをつかむものとしての大切な資料になるものである。模擬授業の後、すぐに板書を見ながらのフィードバックを行った。餅川の示す板書の応用技術でもある、いわゆる板書の構造化にも着目することができた。

表5 板書計画を立てることのメリットと留意点

<b>板書計画を立てることのメリット</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>・授業の流れが明確になり、指導のポイントがはっきりする</li> <li>・子どもの思考の流れを想定することにより、発問や活動が見えてくる</li> <li>・ノート指導にも生かすことができる</li> <li>・学習形態を工夫したり時間配分を考えたりする大きなヒントになる</li> <li>・自分が指導内容を十分に理解しているかどうかの重要な指標になる など</li> </ul>
<b>留意点</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>・板書の中心となる重要な言葉を引き出そうとして発問が一問一答になってしまう</li> <li>・板書計画を立てる際に予想した児童生徒の反応だけを優先的に取り上げがちになってしまう</li> <li>・板書を書くことに気を取られて発問のコーディネートがうまくできない など</li> </ul>

(出所：阿部央 学校教育課通信 県南教育事務所 第144号)

模擬授業後のフィードバックを行い、翌週の全体の模擬授業反省会では、板書計画をしっかりと立てることを改めて確認することによって、小学校教育実習へ意欲的に向かうエネルギーに変えていった。阿部は板書計画を立てることのメリットと留意点を挙げており<sup>(17)</sup> (表5)、学生それぞれが再度認識を深めていった。

実習前アンケートでは不安と期待を抱きながら、「はきはきと積極的に行動すること」、「やる気を見せる」、「小学校の生活に慣れ、現場を知ること」、「さまざまなことへの気付き、素早い行動をとる」、「礼儀正しく、誠実に楽しく学ぶ」、「言葉遣い、自主性、元気で明るさ、前向きに学ぶ」など、模擬授業を経験したのちのアンケート自由記述には意欲を感じられる内容が多く出された。模擬授業での経験から板書技術の習得をきっかけに小学校教育実習へ意欲をもって臨めることを願った。模擬授業での様子を2人紹介する(写真8、9)。



写真8 模擬授業A

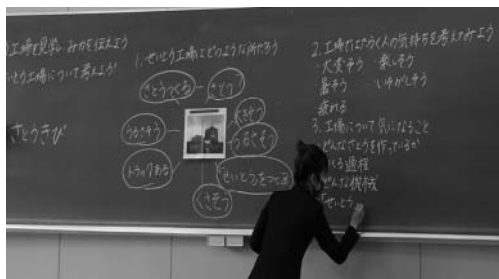


写真9 模擬授業B

板書の応用技術②説明をこの位置で行ったのは、黒板に注目させるには適していた。水引の実物を提示して興味を引きつけ、色チョークも効果的だった。初回から指摘されていたが、文字の書き順が改めて課題になった。基本的な板書技術は、書き順が重要である。

授業の導入では「さとうきび畑」の歌を流した。曲を聴かせることによって、授業にぐっと引きつけられた。写真を貼ったり、子ども役の学生に板書させたりと工夫していた。子どもたちが退屈しないような授業展開があった。写真を貼るためのマグネットが足りない、文字の表記で読みづらい言葉など、基本的なことがらをおろそかにしないことが課題

になった。

板書ベース編として千葉は、「基礎・基本にかかわる学習内容の確認・定着を進める役割を板書が果たしている」と、子どもたちからの要望には「要点が明確で整理されている板書」を示しており<sup>(18)</sup>、模擬授業A、Bの二人は、基礎・基本の力は身に付いたと言える。

## おわりに

小学校教育実習までに板書の基本的な技術を習得するためには、毎時間に少しずつ板書練習を行うだけでなく、模擬授業でも板書を意識させた。言い換えれば、学生自身が納得に近い感覚を得るためには、繰り返し板書し、少しでも板書に慣れる時間が必要だった。すなわち、文字を書いていくという行為に関する能力を身に付けていけるようにしていくことだった。

学生、大学教員ともに板書の書字能力について重要だととらえている。学生は板書の回数を重ねるうちに、文字の大きさ、濃さ、レイアウトやバランス、書き順、書く速さなど基本的な板書技術は上達してきた。また、模擬授業においても板書計画を適切に立て、まずは計画通り板書を試みることができた。模擬授業での板書は記録写真として残し、小学校教育実習で生かすよう学生同士で励まし合っていた。筆者の授業の中で板書技術の習得を繰り返した点は、向上する気持ちと意欲が高まり、実践的に進められたことによって成果が表れたことが明らかになった。

教育実習事前事後に行った聞き取り調査では、「自信がある」、「自信がない」、「課題となった」など、学生によってとらえ方がさまざまだったが、毎回、相互評価を取り入れて、学生自身が課題意識をもって次時につなげるための課題を明確にすることができた点は、効果的な板書ができたと言える。教育実習での研究授業では緊張の中でも、板書については丁寧に文字を書き、色チョークも入れ、掲示物を使い、授業を作り上げた学生の様子が浮かんできた。

板書の文字に苦手意識を感じている現職教員もいると示されているが、大学の授業の中で基本的な技術を習得するための時間を捻出したいものである。実践的な取り組みは、技能向上につながるため、学生が自信をもって実習に臨めるような環境作りは重要であるが、大学のカリキュラムに入れるなどの迅速な対応は難しいところが課題である。

### 【注】

- (1) 押木秀樹 加藤亜紀 森本光 (2005)「教員養成における板書の書字能力向上に関する基礎的研究」全国大学書写書道教育学会『書字書道教育研究』第19号 pp.85-94
- (2) 三次徳二 堀泰樹 (2020)「学生の板書書字技能の向上をねらいとした授業の実践 一大分大学教育学部専門科目『板書演習』の成果と課題―」『大分大学高等教育開発センター紀要』第12号

pp.15-26

- (3) 木村重房 (2016)「授業力育成について (実践報告)」『天理大学人間学部総合教育研究センター紀要』14 巻 pp.71-77
- (4) 餅川正雄 (2009)「高等学校における教育実習に関する研究 (Ⅲ)」『広島経済大学研究論集』第 32 号第 2 号 pp.21-41
- (5) 木村 前掲
- (6) 三次 堀 前掲
- (7) 千葉昇 (2016)「板書什則ー板書の基本と可能性ー」国士舘大学『初等教育論集』pp.80-90
- (8) 林武弘 神原一之 秋山哲 奥野正二 樽谷秀幸 松前良昌 川口浩 (2011)「教育実習指導の効果に関する研究 (Ⅰ)ー附属東雲小学校および同東雲中学校における実習生の意識変容に基づく検討ー」『広島大学 学部・附属学校共同研究機構研究紀要』第 39 号 pp.81-86
- (9) 堀内かおる (2008)「家庭科教員養成における模擬授業の有効性ーコメント・レポートによる相互評価に着目してー」『日本家庭科教育学会誌』第 51 巻第 3 号 pp.169-179
- (10) 愛知県義務教育問題研究協議会 (2014)「若手教員を指導する指導者の意識調査」『若手教員の育成を図る研修の在り方ー中間報告書ー』参考資料 調査① pp.28-37
- (11) 福本菊江「授業の前に板書計画を!!」  
<https://edupedia.jp/wp-content/uploads/2022/06plan-10.pdf?dl=1> 2022/8/15 閲覧
- (12) 三次 堀 前掲
- (13) 同上
- (14) 同上
- (15) 押木 加藤 森 前掲
- (16) 石井洋 (2017)「授業力向上を目指した板書フィードバックに関する一考察」『北海道教育大学紀要 (教育科学編)』第 67 巻第 2 号 pp.105-110
- (17) 阿部央 (2019)「板書から始める授業改善」県南教育事務所『学校教育課通信』第 144 号
- (18) 千葉 前掲

なお本稿は、日本教育カウンセリング学会第 18 回研究発表大会において口頭発表した内容に加筆修正をしたものである。

#### 【謝辞】

本研究にご協力くださった名古屋経営短期大学子ども学科学生及び公立小学校教師の皆様にご心より感謝申し上げます。